



小春日和

川崎ゆきお

季節は一夜で冬になり、急に寒い日が続いた。これは新しい政権が生まれ、政権交代が起きたような感じだ。そんな日がしばらく続いた後、やや暖かい日がある。まるで春が来たように……とはいかないが、冬の一休みで、少し寒さが緩和しただけ。しかし、昨日よりも遙かに暖かい場合、春を感じる。ただこの小春は儚い。なぜなら、これから真冬へと向かうことを知っているの、一時的なものなのだ。決して春が来たわけではない。とってこのまま冬のままかと言え、いずれ春は来る。そのため、冬の政権も長くはない。

「暑いすなあ」

「いやいや、そこまで暑くないですよ」

「昨日に比べれば夏のようだ」

「こんな日は冬物衣料はあまり売れんでしょうなあ」

「この季節、夏物はさすがに売っておらん」

「当然ですよ」

「そこの大通りに古着屋が出来ておるが、夏物はない」

「並べていても、売れないからですよ。この季節にはこの季節に売れるものが並ぶ。初歩の初歩です」

「しかし、冬に夏の服を欲しが人もいるんじゃないのかい。たとえばアロハシャツ」

「アロハシャツなんて、冬に着ますか」

「着てもいいじゃないか。重ね着で」

「中に着るんですか」

「そうだ」

「でも、アロハシャツの柄って、見せるためにあるんでしょ」

「見せるも何も、脱げば裸か、肌着じゃないか、あれを着ないと外には出られない。それが見せることになるのかもしれないがな」

「厚手のアロハシャツなら着るかもしれませんねえ、長袖にして」

「それじゃアロハシャツと言えないじゃないか」

「そうですねえ」

「アロハシャツを冬に着るからいいんだ」

「いいんですか」

「いいんだ。洒落てていいんだ。意外性があるって、いいんだ」

「誰が意外だと思うのですか。下に着るのでしょ」

「サウナで着替えるとき、人に見せるだろ」

「でも、あれは同姓ではなく、異性に見せるのがいいんじゃないですか。あの派手な色柄は、気を引くためだと思うのですが」

「ほう、それは新説だね。考えたこともなかった。涼しいから着ていたんだ」

「まあ、どうせ見えないのですから、中に着られては」

「アロハシャツは小春日和だ」

「夏じゃないですか？ 季節的には」

「そうか」

「気持ちの問題でしょうねえ」

「部屋の暖房をがんがんに効かせてアロハと短パンで過ごす。これはどうだ」

「電気代高く付きますよ」

「大した金額じゃない。それより、気分がよかろう」

「まあ、お宅の中での話ですから、人様に見せるわけではないので、いいんじゃないですか」

「しかし、君が訪問したとき、暑くて仕方がないかもしれんなあ」

「そのときは脱ぎますよ」

「そうか」

「それよりも、温度差に注意した方がいいですよ。そんな暖かい部屋から外に出ると、血管も忙しくなりますからね」

「分かった。アロハシャツはこっそり中に着込む程度にする」

「それがよろしいかと」

「いつも心は小春日和」

「はい」

了